



かごししま遺跡 フオーラム 2025

よみがえる「河口コレクション」の世界 市来貝塚里帰り展
西回り自動車道建設に伴う発掘調査成果の過去と現在

日時 令和7年8月30日(土)

13:00 ~ 16:10

会場 いちき串木野市いちきアクアホール

主催 鹿児島県立埋蔵文化財センター

共催 いちき串木野市教育委員会

(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

市来貝塚

かごしま遺跡フォーラム 2025

よみがえる「河口コレクション」の世界 市来貝塚里帰り展
西回り自動車建設に伴う発掘調査成果の過去と現在

日程

時間	内容
12:30 ~ 13:00	受付
13:00 ~ 13:10	開会行事 あいさつ 県立埋蔵文化財センター所長 寺原 徹 いちき串木野市教育委員会教育長 相良 一洋
13:10 ~ 14:10	講演 「市来貝塚の発掘調査」 上野原縄文の森前園長 前迫 亮一
14:10 ~ 14:40	報告1 「串木野 IC - 市来 IC 間の遺跡について」 県立埋蔵文化財センター調査第一係長 平 美典
14:40 ~ 14:50	休憩
14:50 ~ 15:20	報告2 「南九州西回り自動車建設に伴う最新の発掘調査速報」 (公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 辻 明啓
15:20 ~ 15:40	質疑応答・アンケート記入
15:40 ~ 16:10	ミュージアムトーク (展示物の案内)

目次

河口コレクションとは	1
河口貞徳氏略年譜	2
市来貝塚について	3
今回報告・展示紹介する遺跡	4
「市来貝塚の発掘調査」	5
「串木野 IC - 市来 IC 間の遺跡について」	17
「南九州西回り自動車建設に伴う最新の発掘調査速報」	28
遺跡を3DやAR体験・埋蔵文化財センターホームページとSNSの紹介	32

河コレクションとは

長年、鹿児島県の考古学界をリードしてきた考古学者、河川貞徳氏が調査した遺跡の記録や、土器や石器などの考古資料のことです。その資料は鹿児島県の歴史や文化を知る上で大変貴重なものとなりました。そしてこれらの貴重な資料は、ご遺族のご好意によりまとめて鹿児島県立埋蔵文化財センターへ寄贈していただき、保存・整理・活用を行っています。

考古学者 河川貞徳の生涯と業績

河川貞徳氏は1909(明治42)年鹿児島市加治屋町に生まれ、学生時代や教員時代の一時期は東京や福岡等の県外で生活しますが、人生の大半を鹿児島で過ごしました。発掘調査に携わるようになったのは、40歳になった1949(昭和24)年に鹿児島市笹貫遺跡で行った調査からで、その年に寺師見國氏や三友国五郎氏らとともに創立した鹿児島県考古学会は昨年70周年を迎えました。氏は当初から事務局担当者として会を主導し、1971(昭和46)年から亡くなるまでの約40年間は、会長として会を運営するとともに、県下の遺跡調査・保護に努められました。次に氏の主な業績について振り返ります。

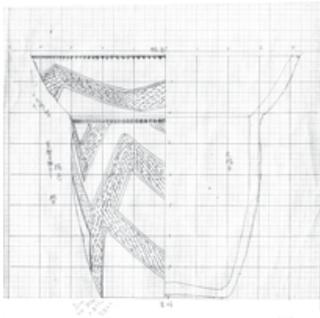


発掘調査指導時の様子

1952(昭和27)年に調査し、報告された日置市黒川洞穴出土の土器は黒川式土器と呼ばれ、当時九州で出土する縄文時代晩期の土器すべてに使われていました。

1958(昭和33)年には砂鉄採掘によって破壊されていた錦江町山ノ口遺跡を調査するとともに関係者によって持ち去られていた軽石製品などを収集しています。これらの資料はその後、弥生時代の祭祀遺物を代表する資料として多くの図書に掲載されるとともに全国の展示会などで公開されました。

1962(昭和37)年に調査した南さつま市高橋貝塚からは、南九州における稲作開始を物語る多くの資料が出土しました。中でも製作途中の南島産貝殻の出土は、この地が弥生時代に北九州などで出土する貝製腕輪の中継地であった可能性について識論される契機となりました。また、1976(昭和51)年に近くの下小路遺跡で発見された合わせ口甕棺墓は、甕棺や出土した腕輪の形から、貝製腕輪製作に携わった人物の墓ではないかと考えられ注目されました。



河川氏の塞ノ神式土器実測図

1968(昭和43)年から翌年にかけて、南さつま市上加世田遺跡や日置市入来遺跡で、シラス採取などによって不幸にも遺跡が破壊される出来事が起こりました。氏は県考古学会員や高校生などの応援をもらいながら、時には鹿児島市から現場まで1人あるいは奥様と2人で出かけ、必死に調査を続けました。遺跡はなくなったものの、南九州の縄文時代後期終末から弥生時代中期初頭を代表する貴重な遺構の記録や遺物が残されることとなりました。

1950年代以降、各地の縄文時代遺跡を調査し、縄文土器の新旧関係を調べる編年作業を進めていましたが、1980(昭和55)年に刊行された霧島市石峰遺跡の報告書では、後に研究者の間で「河川編年」と呼ばれることとなる、南九州で出土する縄文土器の編年案を提示しました。これは今日の縄文土器研究の基礎となっています。

氏はこうした調査で出土した遺物の多くを自宅で洗い、注記・接合・復元し、『鹿児島考古』等の考古学専門誌で積極的に紹介してきました。これらの遺物を見直し、新たな発見・解釈を発表するなど、郷土の歴史解明に対する意欲・熱意は、亡くなる2011(平成23)年まで衰えることはありませんでした。

河口貞徳氏略年譜

年代	年齢	年譜
1909年(明治42)	0	鹿児島市加治屋町にて橋松幸吉の三男として誕生
1928年(昭和3)	19	鹿児島県立第二鹿児島中学校卒業
1930年(昭和5)	21	鹿児島県第一師範学校本科二部卒業
1930年(昭和5)	21	鹿児島県公立玉江尋常高等小学校訓導
1933年(昭和8)	24	鹿児島県第一師範学校専攻科卒業
1936年(昭和11)	27	福岡県公立八幡小学校教員
1939年(昭和14)	30	河口貞徳と改姓
1940年(昭和15)	31	東京市高輪台尋常小学校訓導
1942年(昭和17)	33	立正大学卒業
1943年(昭和18)	34	鹿児島市鶴嶺高等女学校教諭
1948年(昭和23)	39	鹿児島高等学校第一部教諭
1949年(昭和24)	40	寺師見國・三友国五郎などと鹿児島県考古学会を創立 笹貫遺跡調査
1950年(昭和25)	41	鹿児島玉龍高等学校教諭 中津野遺跡・千束遺跡・岩崎遺跡・一の宮遺跡調査
1951年(昭和26)	42	草野貝塚調査 「一の宮遺蹟報告」
1952年(昭和27)	43	日本考古学協会会員となる。寺師見國・三友国五郎・国分直一等と『鹿児島県考古学会紀要』を発行 鹿児島市文化財専門委員。京都大学文学部に内地留学 春日町遺跡・黒川洞穴・大原遺跡調査 「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」
1953年(昭和28)	44	鹿児島県文化財専門委員(文化財保護審議会委員～1995) 石坂上遺跡調査・出水貝塚調査
1954年(昭和29)	45	宇宿貝塚調査・出水貝塚調査
1955年(昭和30)	46	「鹿児島のおいたち—先史時代」 「鹿児島市春日町遺蹟発掘調査報告」 「南九州出土の条痕土器—吉田村及び知覧町遺蹟」
1957年(昭和32)	48	「南九州後期の縄文式土器—市来式土器」
1958年(昭和33)	49	山ノ口遺跡調査
1960年(昭和35)	51	「山ノ口遺蹟」
1961年(昭和36)	52	鹿児島大学非常勤講師(～1985) 宝島浜坂貝塚調査・市来貝塚調査
1962年(昭和37)	53	高橋貝塚調査
1963年(昭和38)	54	入佐遺跡調査
1965年(昭和40)	56	「鹿児島県高橋貝塚」
1966年(昭和41)	57	南日本文化賞(南日本新聞社) 鶴嶺窯跡調査
1967年(昭和42)	58	鹿児島玉龍高等学校を退職。池水寛治等と鹿児島県史跡調査会を創立 「鹿児島県黒川洞穴」
1968年(昭和43)	59	上加世田遺跡調査
1969年(昭和44)	60	入来遺跡調査
1970年(昭和45)	61	文化財功労者表彰(文化庁)
1971年(昭和46)	62	鹿児島県考古学会会長就任 平梶貝塚調査
1972年(昭和47)	63	「塞ノ神式土器」
1973年(昭和48)	64	「鍬形石の祖形—松ノ尾遺跡出土の貝製腕輪」
1974年(昭和49)	65	嘉徳遺跡調査 「奄美における土器文化の編年について」
1976年(昭和51)	67	下小路遺跡調査
1978年(昭和53)	69	昭和53年度朝日学術奨励金を三島格(代表)らとともに受ける(研究題目「九州と南島の古代文化の交渉研究」)
1979年(昭和54)	70	勲五等雙光旭日章受勲
1980年(昭和55)	71	東黒土田遺跡調査
1981年(昭和56)	72	「市来式の祖形と南島先史文化への影響」
1982年(昭和57)	73	中甫洞穴調査 「縄文草創期の貯蔵穴—鹿児島県東黒土田遺蹟」
1988年(昭和63)	79	『日本の古代遺蹟 38 鹿児島』
1989年(平成元)	80	「吉田式と前平式のその後について—南九州の早期縄文土器」
1990年(平成2)	81	「縄文晩期の土器—上加世田44年8月調査資料を中心に」
1991年(平成3)	82	「市来式と擦切手法」
1993年(平成5)	84	「型式の再考察—山ノ口遺蹟ほか」
1995年(平成7)	86	「考古学における型式の実態」
1998年(平成10)	89	地域文化功労者賞受賞(県考古学会)
2000年(平成12)	91	「縄文から弥生へ軟着陸の高橋貝塚」
2001年(平成13)	92	「新田神社・三角縁神獸鏡」
2008年(平成20)	99	日本考古学協会賞受賞
2011年(平成23)	101	1月10日満101歳で逝去



市来貝塚

市来貝塚は、八房川左岸の標高約 10m 前後の河岸段丘上に位置します。県内の縄文時代後期前葉から中葉を代表する遺跡として大正年間から知られており、市来式土器の標式遺跡ともなっています。

大正 9 年、当時西市来^{じんじょう}尋常小学校に赴任してきた有村栄助が貝塚を発見し、翌年、山崎五十磨が発掘調査を行いました。その後、昭和 36 年 3 月に、貝塚の現状把握を計画した市来村の委託を受けて、河口貞徳が調査責任者として発掘調査を行いました。

調査は、貝層部分に A・B 2 か所のトレンチ（試掘穴）を設定して行われました。その結果、大量の貝類とともに縄文土器・土製品や石器・石製品、貝製品や骨角製品が数多く出土したほか、A トレンチからは 2 体の縄文人骨が、B トレンチからも 1 体の縄文人骨が発掘されました。平成 6（1994）年 3 月に、鹿児島県の史跡に指定されました。



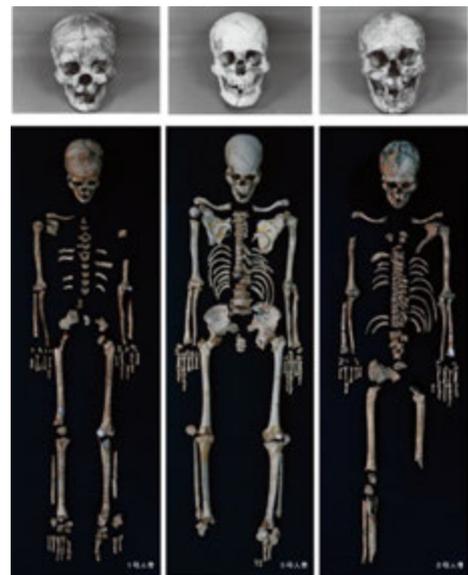
市来式土器

縄文後期中葉（約 4,000 年前）の南九州で流行した土器の種類です。市来貝塚の発掘調査で初めて特徴を確認できたことから、この名前がつけられました。深鉢が中心で、口縁まわりの断面を三角形に厚くしているのが特徴です。そこには、二枚貝の縁や竹ベラ状の工具による刻目などの文様がつけられます。



市来縄文人骨

埋葬したと考えられる遺構 3 か所から、それぞれ 1 体ずつ発見されました。この市来縄文人骨は、昭和 50(1975)年代後半に長崎大学の内藤芳篤教授により同定されており、従来言われていた南九州の低身・短頭の集団とは異なり、他地域の九州縄文人骨との類似性が強いことが明らかになっています。特に推定身長については、縄文人の平均は 160 cm 未満のことが多いのですが、九州では多少高いことがわかり、なかでも男性である 3 号市来縄文人は、163.46cm でかなり高身長であることがわかりました。それに対し、女性である 1・2 号市来縄文人は、147.54cm と平均値並みであり、他の縄文人と大きな差はないことがわかりました。市来縄文人骨は、調査から 60 年以上経過した今日においても、類例が少ない縄文人骨の検出例として極めて貴重な資料となっています。



1号人骨

3号人骨

2号人骨

今回報告・展示紹介する遺跡



出水市



阿久根市



いちき串木野市

市来貝塚の発掘調査 - 〈昭和36年調査〉の紹介 -

前迫 亮一

はじめに

市来貝塚は、九州の縄文時代を代表する遺跡の1つとして、古くから登場します。考古学の世界で長く愛されてきた『図解 考古学辞典』（東京創元社刊）にも「市来貝塚」の項目で掲載されています。これは昭和34（1959）年に初版が刊行された考古学専門の辞典になります（表2-18）。

この市来貝塚の発掘調査を手掛けた研究者に、長く鹿児島県の考古学研究をリードされてきた河口貞徳氏がおられます。残念ながら氏は、平成23（2011）年1月に101歳でご逝去されましたが、ご自宅に収蔵・保管されていた膨大な考古関係資料が、ご遺族の方々のご厚意により、平成24（2012）年12月に鹿児島県立埋蔵文化財センターに寄贈されました。これらの寄贈品は、通称「河口コレクション」の名で呼ばれ、再整理や展示活動が行われてきています。

今回はその「河口コレクション」にある市来貝塚の資料を中心に紹介し、また市来貝塚出土の土器を基準に命名された市来式土器についても触れることで、市来貝塚について考える機会にしたいと思います。ちなみに、いちき串木野市市来町川上に所在することから、川上貝塚とも呼ばれますが、ここでは長い研究史の中で使用されてきた市来貝塚という名称で進めていきたいと思っています。

1 市来貝塚の発見

市来貝塚は旧市来町の中心部を流れる八房川の中流にあり、河口から直線距離で約3kmの左岸、標高12～13mの河岸段丘上及びその斜面に残されている遺跡です。

この市来貝塚の発見の経緯については、昭和57（1982）年に刊行された『市来町郷土誌』（表2-34）に詳しく記されていますので紹介したいと思います。

市来貝塚が遺跡として認識される最初のきっかけを作ったのが、大正9（1920）年9月、当時西市来尋常高等小学校（新しく設置された鹿児島県第二師範学校の代用附属小学校）の首席訓導として市来に赴任してきた有村栄助氏でした。

有村氏はある日、近所に住んでいた江夏盛吉という人物（魚の干物などを川上方面に売りに行く仕事をされていた）に「貝殻の出るところを知りませんか」と尋ねます。すると「川上にあるよ」との返事。そこで有村氏は小学校の同僚数人を誘って試掘したところ、貝塚であることを確認。早速当時の勝目實禎村長に相談して資金を調達し、発掘調査が行われることとなりました。



図1 市来貝塚の位置（●印）

大正 10 (1921) 年 3 月のことでした。今から 100 年以上も前の話になります。わざわざ貝塚の存在を訪ねているところから、有村氏も考古学に興味を持っていたことがうかがえます。

2 市来貝塚の発掘調査① -大正 10 年調査-

初めての専門家による発掘調査にあたって、有村氏は当時鹿児島県における考古学研究の第一人者であった山崎五十麿氏（鹿児島の専売局に勤務。後に市来専売局長）に依頼しました。

山崎氏は有村氏等が試掘した部分に隣接した場所を発掘し、同年 8 月刊行の『考古学雑誌』という考古学の専門誌に、その調査結果を報告しています（山崎五十麿 1921「薩摩国日置郡西市来村貝塚に就て」『考古学雑誌』11-12 日本考古学会）。調査から半年後には全国的な専門誌に発表された山崎氏のスピード感のある研究力・行動力に頭が下がります。見倣わないといけないところですよ（表 2-1）。

報告によると、地表面には「稀薄に黒曜石散乱」とあります。それまでの試掘や攪乱の結果かもしれない。掘削すると「七寸にして貝層に達す」とありますから、約 20cm 掘り下げたところで貝層に到達したことがわかります。「貝層は二尺三寸で盡（つ）く」とありますので、厚さ 70cm 程度でしょうか。ただ、先の有村氏らの調査状況も含め、貝層の最も厚いところは五六尺（150～180cm 程度）あるものと推定されています。

わずか四尺四方（約 1.5 m²）の面積が対象で、今日の確認調査的な発掘ではありましたが、縄文土器・石器・獣骨・貝輪等の貝製品など、多くの出土品がありました。また貝塚の中心となる貝殻が少なくとも 22 種類確認されたことも報告されています。

小規模とは言え、これが市来貝塚の最初の発掘調査でした。先に述べた通り、山崎氏の調査報告の発表によって、市来貝塚は全国の考古学研究者が注目する遺跡となりました。

表 1 にあるように、市来貝塚の発掘調査は、この回も含めこれまで計 7 回実施されています。今回紹介するのは、表 1 の 5 番目にある「昭和 36 年調査」になりますが、その前に市来貝塚由来の土器について触れておきたいと思います。

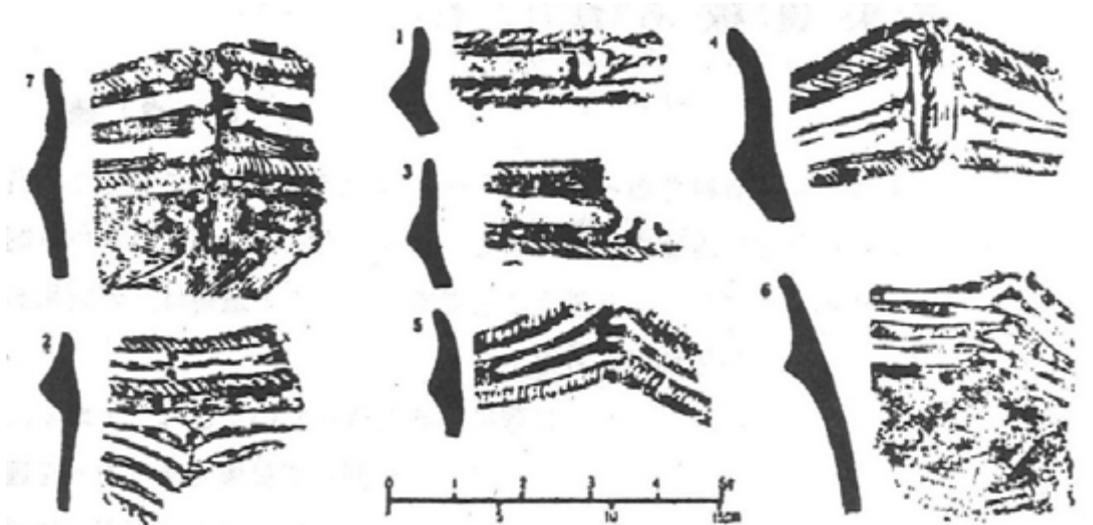
表 1 市来貝塚の発掘調査履歴一覧

番号	調査期間	調査起因等	調査主体等	文献・備考
	大正10(1921)年3月	地元の江夏盛吉の情報を得て、当時西市来尋常高等小学校訓導であつた有村栄助が発見		
1	大正10(1921)年8月	学術調査	山崎五十麿	山崎1921
2	大正15(1926)年3月14日	学術調査	清野謙次・山崎五十麿	清野1928・1969, 田幡1930
3	昭和12(1937)年3月6日	学術調査	寺師見國	
4	昭和25(1950)年12月	学術調査	河口貞徳	
5	昭和36(1961)年3月22日～3月31日	学術調査	河口貞徳	河口1966, 内藤1984, 河口他1991, 鹿理セ2023
6	平成2(1990)年10月1日～11月6日	遺跡範囲確認調査	市来町教育委員会	町教委1991(県教委の新東晃一・堂込秀人担当)
7	平成4(1992)年5月14日～7月23日	遺跡範囲確認調査	市来町教育委員会	町教委1993(県教委の新東晃一・児玉健一郎担当)

3 市来式土器の誕生

山崎氏によって紹介された市来貝塚の出土資料が発端となり、「市来式土器」と呼ばれる縄文土器が誕生したことについて紹介しておきます。

京都大学考古学研究室の浜田耕作氏のもとで考古学を学んで、昭和 10 年前後を中心にわが国の考古学界で活躍された三森定男という研究者が、当時京都大学に収蔵されていた九州の縄文土器の中から、共通の特徴を持つ一群を取り上げて紹介しました。昭和 10 (1935) 年のことです



第一期 1. 2. 大塚園子層部強町大字中名字中ノ原出土 3.-4. 随摩園
 浅瀬部稲村澤ノ原十二町出土 7. 肥前國北高来郡有喜村六本松出土
 (以上京大考古学教室所蔵)

図2 三森氏が提示した最初の市来式土器関係資料 (表2-6より)

(三森定男 1935「九州に於ける縄文土器の一形式」『ドルメン』4-6)。これはそれまでに京都大学の研究者によって調査された、鹿屋市中ノ原遺跡と指宿市橋牟礼川遺跡、長崎県諫早市にある有喜貝塚の出土品の中から注目した土器の一群でした (表2-6)。

その後三森は、昭和13(1938)年から刊行され、当時人類学・考古学における最先端の概説書であった『人類学先史学講座』の第1巻で、“九州における先史時代文化の土器”として紹介し、初めて「市来式土器」という名称を用いました (表2-7)。

ちなみに「市来式」の名称を用いたことについて三森氏は、「寺師見國氏の発掘に係かる一群の資料を同氏の好意によって調査することができた」と記し、「出土土器の基調をなすもので、突角形をなす口縁部を有するのが特徴である」として紹介しました。山崎氏の論文も提示しつつ、表1の3番目にある寺師氏の「昭和12(1937)年調査」の資料を調査・観察した結果だったことがわかります。

考古学の世界では、文字のない時代に、ある地域で流行した同じ文様・形態を持つ土器のまとまりを、「型式^{けいしき}」というグループとしてとらえ、その特徴を示す土器が出土した遺跡名(〇〇)を取って「〇〇式土器」とし、命名のもとになった遺跡を「標式遺跡」と呼ぶ基本的なルールがあります。つまり、「市来式土器」の「標式遺跡」は「市来貝塚」ということになります。全国には1,000種類ほどの土器型式があり、鹿児島でも約50(細分すると100程度)の型式が設定され用いられています。この土器型式の新旧を明らかにし、時間的に並べた年表のことを「土器編年表」と呼んでいます。

縄文時代は、大きく草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つの時期に区分して時間の流れを表すのが一般的です。市来貝塚由来の「市来式土器」は縄文時代後期の半ばごろ(約3,800年前)の土器として位置づけられています。

平成20(2008)年に刊行された縄文土器の総合辞典:『総覧 縄文土器』(表2-57)では、全国109種類の土器型式等の項目が設定され、「市来式土器」もしっかりと選ばれて紹介されています。市来式土器の特徴については、のちほど取り上げたいと思います。

表2 市来貝塚関連の文献一覧

番号	刊行年	文献名	著者	備考
1	大正10(1921)	「薩摩国日置郡西市来村貝塚に就て」『考古学雑誌』11-12 日本考古学会	山崎五十磨	表1-1の調査概要報告
2	昭和3(1928)	「薩摩国日置郡西市来村大字川上宇宮の後貝塚」『日本石器時代人研究』岡書院	清野謙次	表1-2の調査概要報告
3	昭和5(1930)	「薩摩国日置郡西市来村大字川上宇宮の後貝塚人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』45-48附 日本人類学会	田幡丈夫	表1-2の調査概要報告
4	昭和6(1931)	「古代史 西市来の貝塚」『鹿児島県郷土史大系』2	松下重資	
5	昭和7(1932)	「薩摩国西市来貝塚」『史蹟名勝天然記念物』7-4 史蹟名勝天然記念物保存協会	横山将三郎	
6	昭和10(1935)	「九州に於ける縄文土器の一形式」『ドルメン』4-6 岡書院	三森定男	
7	昭和13(1938)	「先史時代の西部日本(上)」『人類学先史学講座』1 雄山閣	三森定男	市来式土器の型式設定文献
8	昭和14(1939)	「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11 雄山閣	小林久雄	
9	昭和14(1939)	「肥後水俣南福寺貝塚-南福寺式土器-」『考古学』10-7 東京考古学会	寺師見國	
10	昭和14(1939)	「鹿児島県先史時代の研究」『昭和13年度鹿児島県中等学校教育研究会発表資料』	木村幹夫	『木村幹夫考古学論文集』(1960)所収
11	昭和18(1943)	「九州縄文式土器の分類」『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』鹿児島県華國聖跡調査會	寺師見國	
12	昭和24(1949)	「鹿児島県桜島武貝塚」『日本考古学年報』2 日本考古学協会	小林行雄	
13	昭和27(1952)	「草野貝塚発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』1 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
14	昭和29(1954)	『南九州の縄文式土器』	寺師見國	
15	昭和30(1955)	「先史時代 縄文式時代」『鹿児島のおいたち』鹿児島市	河口貞徳	
16	昭和31(1956)	「各地域の縄文式土器 九州」『日本考古学講座』3 河出書房	賀川光夫	
17	昭和32(1957)	「南九州後期の縄文式土器-市来式土器-」『考古学雑誌』42-2 日本考古学会	河口貞徳	
18	昭和34(1959)	「市来貝塚」『図解 考古学辞典』東京創元社	小林行雄	
19	昭和37(1962)	「市来貝塚」「市来式土器」『日本考古学事典』東京堂	河口貞徳	
20	昭和37(1962)	「九州に於ける縄文土器の編年」『先史学研究』4 同志社大学先史学会	鈴木重治	
21	昭和40(1965)	「縄文文化の発展と地域性 九州西北部」『日本の考古学』II 河出書房新社	乙益重隆	
22	昭和40(1965)	「縄文文化の発展と地域性 九州東南部」『日本の考古学』II 河出書房新社	賀川光夫	
23	昭和41(1966)	「鹿児島県日置郡市来貝塚」『日本考古学年報』14 日本考古学協会	河口貞徳	表1-5の調査概要報告
24	昭和44(1969)	「後期縄文文化-九州-」『新版考古学講座』3 雄山閣	乙益重隆・前川威洋	
25	昭和44(1969)	「薩摩国日置郡西市来村大字川上宇宮の後貝塚」『日本貝塚の研究』岩波書店	清野謙次	表1-2の調査概要報告
26	昭和46(1971)	「沖縄県浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」『古代文化』23-9・10 古代文化協会	新田重清	
27	昭和49(1974)	「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
28	昭和54(1979)	「市来貝塚」『世界考古学事典(上)』平凡社	河口貞徳	
29	昭和54(1979)	「九州後期縄文土器の諸問題」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会	前川威洋	
30	昭和56(1981)	「市来式の祖形と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』15 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
31	昭和56(1981)	「縄文土器II-市来式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣	本天道輝	
32	昭和56(1981)	「市来貝塚」「市来式土器」『鹿児島大百科事典』南日本新聞社	河口貞徳	
33	昭和56(1981)	「九州地方」『縄文土器大成3 後期』講談社	木村幾多郎	
34	昭和57(1982)	「縄文時代 I 市来貝塚」『市来町郷土誌』市来町		
35	昭和59(1984)	「南西初頭における古代人骨の人類学的研究」『鹿大考古』2 鹿児島大学考古学研究室	内藤芳篤	表1-5の調査報告
36	昭和60(1985)	「市来式土器の基礎的研究(I)」『人文科学論集』22 鹿児島大学法文学部紀要	本天道輝	
37	昭和61(1986)	「市来貝塚あれこれ」『鹿児島考古』20 鹿児島県考古学会	河口貞徳	
38	昭和61(1986)	「市来式と擦切技法」『シンポジウム 市来式について』『考古月報』1 鹿児島県考古学会	河口貞徳・出口浩他	
39	昭和63(1988)	「薩摩半島西岸域の遺跡 市来貝塚」『日本の古代遺跡38 鹿児島』保育社	河口貞徳	
40	昭和63(1988)	「(入門講座)縄文土器-九州地方 南九州(2)-」『考古学ジャーナル』296 ニューサイエンス社	新東晃一	
41	昭和63(1988)	「市来式土器の基礎的研究(II)」『人文科学論集』28 鹿児島大学法文学部紀要	本天道輝	
42	平成元(1989)	「市来-一湊式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』小学館	本天道輝	
43	平成元(1989)	「土器様式変化の一類型」『横山浩一先生退官記念論集 I 生産と流通の考古学』	松永幸男	
44	平成3(1991)	「川上(市来)貝塚」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』1 市来町教育委員会	市来町教育委員会	表1-6の調査報告
45	平成3(1991)	「特集 市来貝塚」『鹿児島考古』25 鹿児島県考古学会	河口貞徳・本天道輝他	表1-5の調査報告を含む
46	平成3(1991)	「貝類から見た川上貝塚の環境」『南九州縄文通信』5 南九州縄文研究会	坂下泰典	
47	平成3(1991)	「南九州の縄文後期の貝輪」『南九州縄文通信』5 南九州縄文研究会	新東晃一	
48	平成5(1993)	「川上(市来)貝塚」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』2 市来町教育委員会	市来町教育委員会	表1-7の調査報告
49	平成5(1993)	「南島と市来式系土器」『南日本文化研究所叢書』18 南日本文化研究所	本天道輝	
50	平成6(1994)	「市来式土器」「市来貝塚」『縄文時代事典』東京堂出版	木崎康弘	
51	平成6(1994)	「異系統土器の一接点」『南九州縄文通信』8 南九州縄文研究会	前迫亮一	
52	平成7(1995)	「市来貝塚」『日本古代遺跡事典』吉川弘文館	本天道輝	
53	平成8(1996)	「市来式土器」『日本土器事典』雄山閣	本天道輝	
54	平成11(1999)	「鹿児島県の古代貝文化」『鹿児島考古』33 鹿児島県考古学会	木下尚子	
55	平成17(2005)	「市来貝塚」『先史・古代の鹿児島(資料編)』鹿児島県教育委員会	新町 正	
56	平成18(2006)	「本野原遺跡三」『宮崎市文化財調査報告書』宮崎市教育委員会	金丸武司	
57	平成20(2008)	「市来式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション	前迫亮一	
58	平成22(2010)	「縁帯土器群について 市来式」『西日本の縄文土器 後期』真陽社	水ノ江和同・前迫亮一	
59	平成31(2019)	「“市来の中の市来”式土器を考える」『中山清美と奄美学』奄美考古学会	前迫亮一	
60	令和5(2023)	「市来貝塚」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』218 県立埋文センター	県立埋文センター	表1-5の調査報告
61	令和5(2023)	「市来貝塚の市来式土器」『愛媛考古学』27 愛媛考古学会	前迫亮一	

4 市来貝塚の発掘調査② -昭和36年調査-

それでは、表1の5番目にある「昭和36年調査」について紹介したいと思います。ここで登場するのが河口貞徳氏です。河口氏は当時、鹿児島玉龍高等学校教諭で同校考古学部の顧問であり県の文化財専門員（現在の文化財保護審議会委員）でもありました。

河口氏はまず、昭和25（1950）年の12月末に、教え子である池水寛治氏（のちに出水高等学校で考古学部を結成し、多くの教え子たちが巣立つ）を含む高校生2,3名と対象面積2m四方（約4.0㎡）の発掘調査を実施し、貝層以外の遺物包含層があることを確認しました。

ところがそれから約10年後、市来貝塚の一面が幅2m・長さ3mほど掘り起こされるとい盗掘事件が起こります。その時の現場のことを河口氏は「珍品のみ持ち去られたものと見られ、そこらじゅうに土器や貝殻・獣骨などが散乱したまま打ち捨ててあった」と記しています。当時の市来町は県と協議し、その対応策として学術調査を実施することとし、河口氏がその調査責任者に任ぜられたということになります（表2-37,45）。

(1) 調査の概要

発掘調査は、昭和36（1961）年の3月22日から同月31日までの10日間行われました。調査には玉龍高等学校のOBや生徒（昭和25年調査に参加した池水寛治氏やのちに鹿児島大学名誉教授になられる上村俊雄氏も参加）、地元の作業員さんや多くの中高生が参加しました。

調査箇所は、台地の北側斜面にある谷状地形に、3段形成されたうちの2段目の平坦面を中心に設定されました。その平坦面はこれまで何回か調査されたところでもあり、調査のきっかけとなった盗掘事件のあった場所でもありました。

平坦面の中央部に2×16mのAトレンチ（試掘坑：調査のためのあな）と上の段との斜面に2×6mのBトレンチを設定。さらに一部拡張するなどして、計53.5㎡の広さで調査が行われました（表2-45,60）。

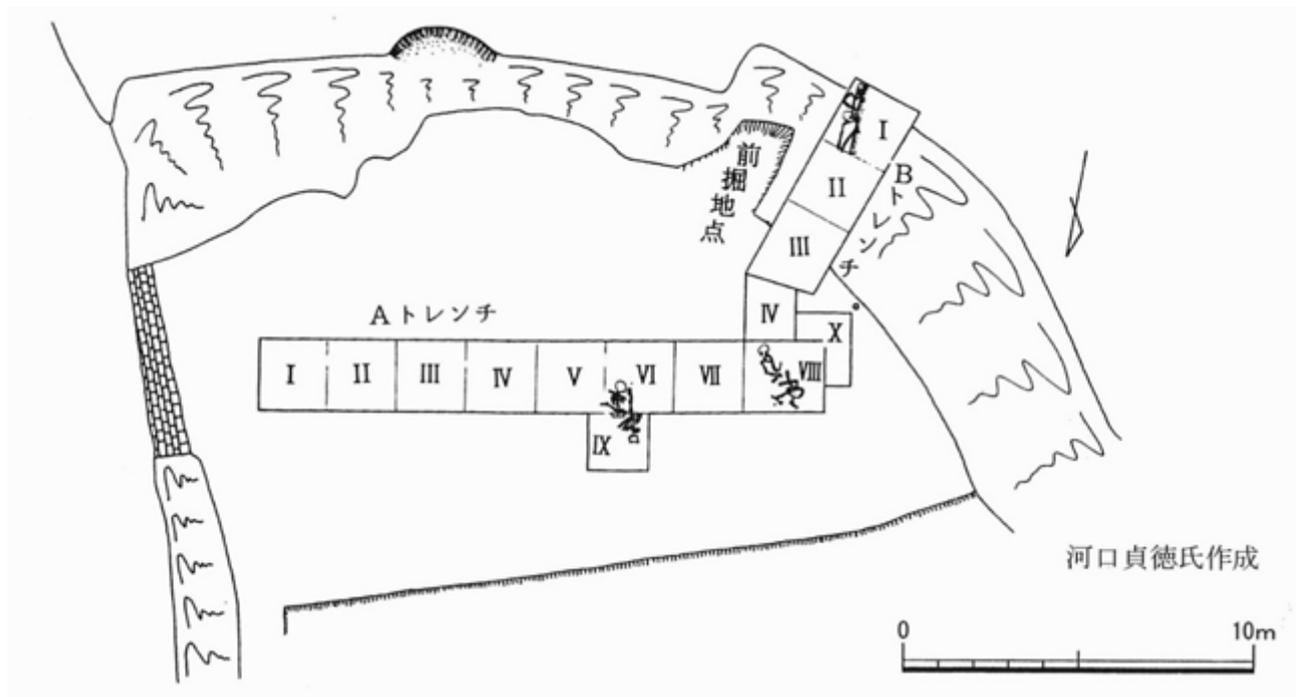


図3 市来貝塚発掘調査トレンチ位置：昭和36年調査（表2-45,60より）

(2) 調査の成果

① Aトレンチ

平坦面の中央にほぼ東西方向に設定されたAトレンチは、盗掘によるとみられる貝混じりの表土で覆われていました。貝を含む遺物包含層（土器や石器などの遺物を含む地層）は、地表下約30～60cmで到達。貝と土が混ざる混土貝層（貝の濃淡でおおよそ3層に分離可能）で、層の厚さは40～260cmほどで、東に行くにつれて次第に厚くなる状況が確認できました。

遺構（図4）

遺構としては炉跡状の石のまとまりが2か所検出されました。これらは集石遺構と呼ばれています。5～40cmほどの長さの石を40～60個楕円形状に集めたもので、遺構内外から炭や灰等が確認されていることから、火を用いた施設である可能性が高いと考えられています。

また注目されるのが、人物2体の埋葬遺構が検出されたことでした。いずれも市来式土器が用いられたころの縄文人骨と考えられます。古人骨の先生が調査され、ともに熟年女性で推定身長がそれぞれ146.37cm、148.7cmとの結果が出ています（表2-35）。1号人骨の周囲には、意図的に並べられたと考えられる長さ30～50cmの礫が数個検出されました。また、2号人骨の足元からは、孔（あな）の開いた円形の軽石加工品（図5-10）が出土しました。いずれも仰向けで膝を折り曲げた仰臥屈葬の姿勢で見つかっており、埋葬された状態と考えられています。

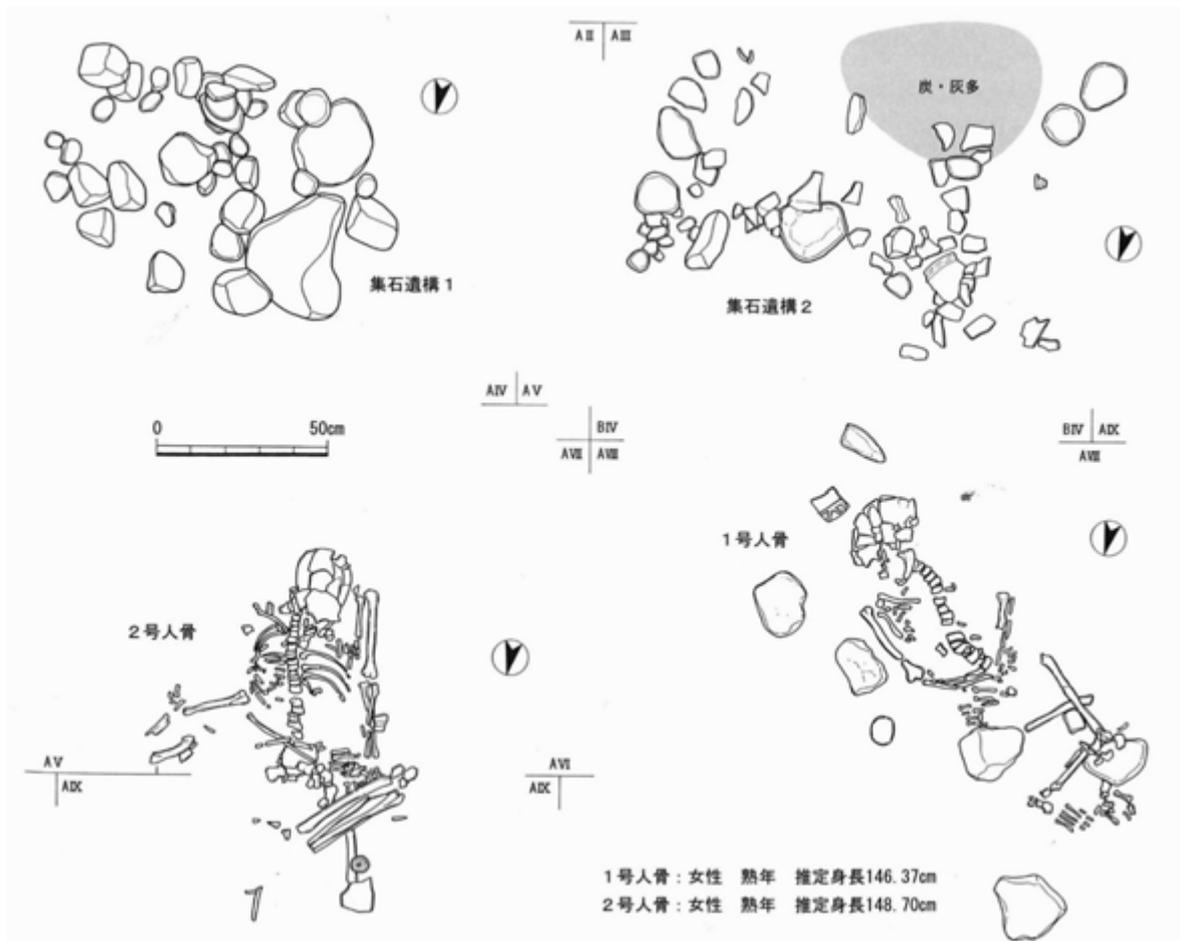


図4 集石遺構及び縄文人骨の検出状況（表2-60より）

遺物 (図5)

出土した土器は、縄文時代後期初頭(約4,300年前)から中ごろ(約3,800年前)のものでしたが、その中心(土器全体の約60%)は後期の中ごろに流行した市来式土器(図5-1~4)でした。市来式土器の前段階とされている松山式土器や市来式土器と同時期に用いられたと考えられる鐘崎式土器(図5-6)なども出土しました。市来式土器に伴う台付皿(鉢)形土器も注目されます。図5-7は、赤や白の顔料(絵の具のようなもの)が際立つ資料(脚台)です。また、割れた土器を円盤状に加工した製品(図5-8)も多くみられました。

その他、石鏃や磨敲石、砥石などの石器や未製品を含む多くの貝輪・貝刃(図5-11)・有孔貝製品・篋状貝製品などの貝製品、釣針(図5-12)や簪(かんざし)、篋状骨製品などの骨角器が出土しました。

② Bトレンチ

BトレンチはAトレンチのある平坦面から台地最上段への斜面に設定されました。ほぼ45度もある急斜面でしたが、70~150cmほどの表土の下に40~260cmほどの混土貝層が検出されました。一部純貝層的な貝殻が濃密に堆積した部分もありましたが、河口氏は「Aトレンチに比べて貝の量は極めて少なく、貝塚と呼ぶには抵抗を感ずるほどである」と記録しています。

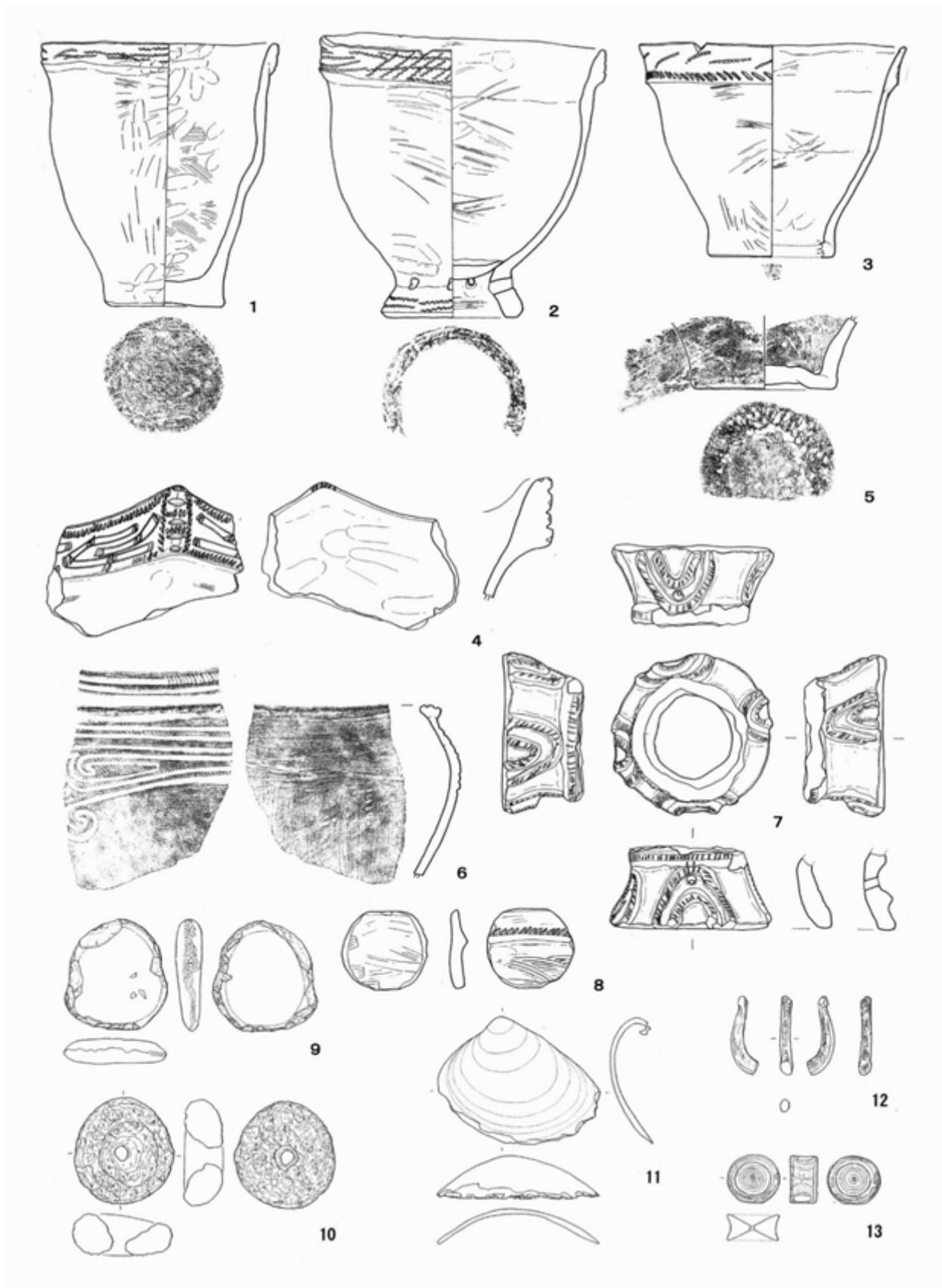
斜面ということもあり遺構はほとんど確認されませんでした。調査最下部において土地の基盤をなす巨岩の陰から1体の人骨が発見されました。まっすぐ仰向けに寝かされた状態(仰臥伸展葬)で、意図的に岩陰に安置・埋葬したものと考えられています。河口氏の調査日誌に「少量の出水式土器の破片を人骨付近に出土」とあることや、遺物の項にあるようにBトレンチ出土の土器が出水式土器中心であったことから出水式土器(約4,300年前)が流行したころの縄文人骨である可能性が高いと考えられています。

出土した土器は縄文時代中期の中ごろ(約4,500年前)から後期の後半(約3,500年前)のものでしたが、その中心(土器全体の約70%)となるのが後期初頭の出水式土器でした。Aトレンチと数mしか離れていないのに、中心となる土器が異なるという興味深い結果が出ていますが、Bトレンチは斜面ということを考慮すると、出水式土器を用いた縄文人たちの生活の場はAトレンチより一段上の台地最上段にあったと考えてよさそうです。

その他には、磨製石斧(図6-4)や棒状叩石(図6-5)、砥石などの石器、軽石加工品や用途不明な特殊石製品、未製品を含む多くの貝輪(図6-6)、篋状骨製品・刺突具(図6-7,8)などの骨角器などが出土しました。

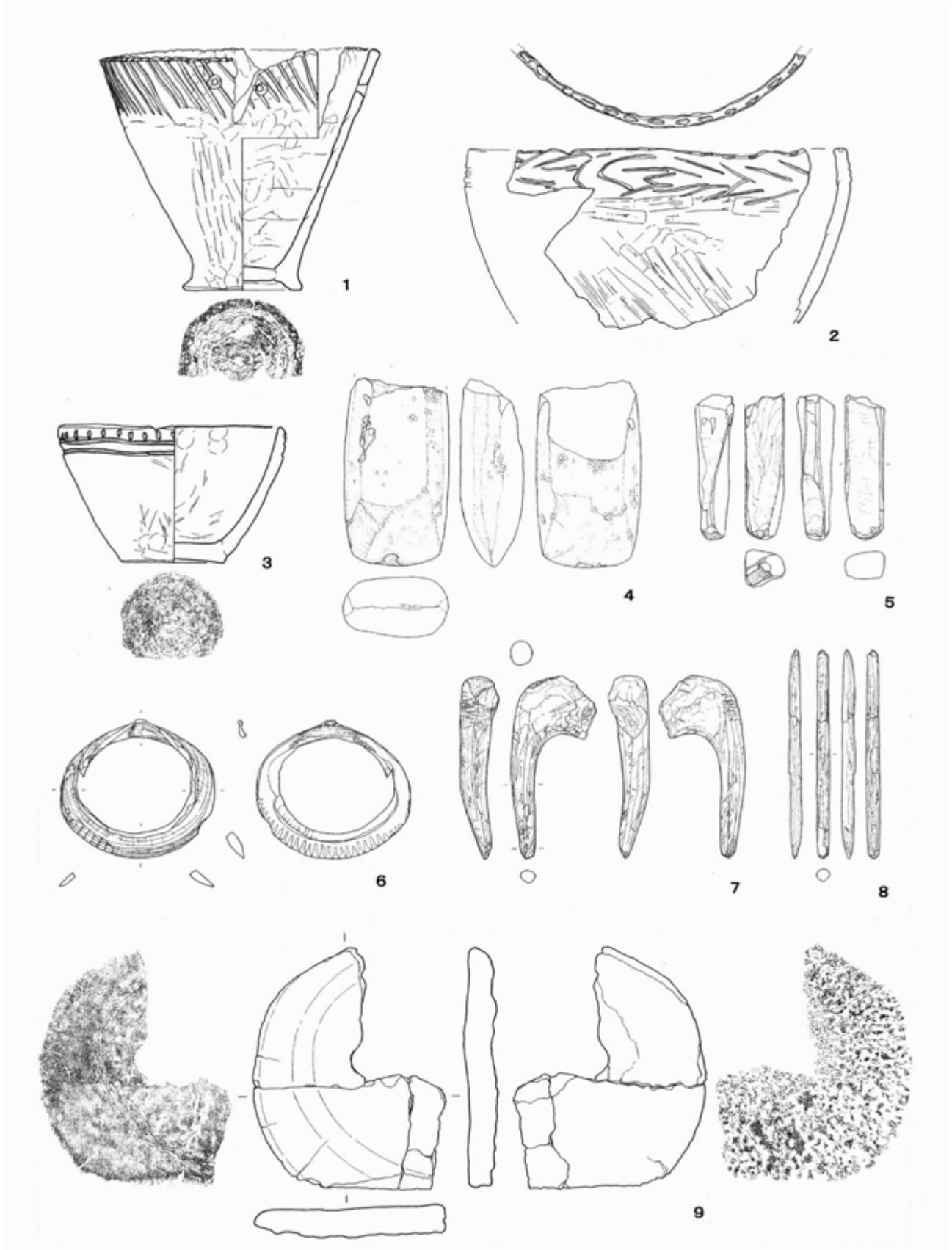
珍しいものとして、クジラの椎骨が2点出土しています。ほぼ円形をなす1点は長軸27.6cm、短軸が24.0cmもありました。金沢大学の内山純蔵氏によると、いずれもマッコウクジラの椎骨(椎体後縁部)と考えられ、椎体本体と融合していないことから、成熟段階、20歳未満の個体の可能性が高いとのことでした。1点(図6-9)には明らかな研磨痕があることから、土器製作時の台として利用したことも考えられます。実際に市来貝塚からも土器の底にクジラの椎骨痕が残る、いわゆる鯨底も数点出土しています(図5-8など)。

これらのクジラの骨は捕鯨によるものではなく、何らかのアクシデントで海岸に打ちあがった個体のものである可能性が高いと考えられています。



(縮尺は1~8 : 1/4, 9~13 : 1/3)

図5 市来貝塚「昭和36年調査」: Aトレンチ出土の主な遺物(表2-60より)



(縮尺は1~3・9 : 1/4, 4~8 : 1/3)

図6 市来貝塚「昭和36年調査」: Bトレンチ出土の主な遺物(表2-60より)

以上2つのトレンチを調査した結果をふまえ、主な成果を整理すると以下のようになります。

- (ア) 縄文時代後期の初頭（約 4,300 年前）から中ごろ（約 3,800 年前）を中心とする混土貝層（土混じりの貝層）が確認されました。
- (イ) A・Bトレンチ、それぞれ市来式土器と出水式土器の時期が中心であることがわかりました。
- (ウ) 縄文土器のほか、各種の石器・石製品・貝製品・骨角器が出土しました。
- (エ) 貝輪の製品・未製品が多く出土しました。
- (オ) 人の手が加わったクジラの骨が出土しました。
- (カ) 3体の縄文人骨（市来式土器に伴う女性が2体：1,2号人骨，出水式土器に伴う男性が1体：3号）を検出しました。



写真1 市来貝塚検出の縄文人骨：左から1号，2号，3号人骨（表2-60より）

一部盗掘されたとは言え、貝層の厚さからかなり残りの良い貝塚であることが確認され、市来貝塚が縄文時代研究に欠かせない遺跡であることを証明してくれました。その後長く発掘調査は行われませんでした。表1にあるように平成2（1990）年と平成4（1992）年に市来町教育委員会によって遺跡の範囲確認調査が実施され、台地の上や裾部分においても遺物包含層が確認されました。それらの成果を踏まえ、平成6（1994）年3月には鹿児島県の史跡に指定されました。発見から74年後のことでした。

5 市来式土器の特徴と分布

今から90年近く前、三森定男氏によって初めて設定された市来式土器は、現在でも九州を代表するという縄文土器として欠かせない存在となっています。

市来式土器の特徴と分布（広がり）について少し紹介したいと思います。

器形（図7）

器の形は深鉢・台付皿（鉢）・舟形口縁壺などがあります。

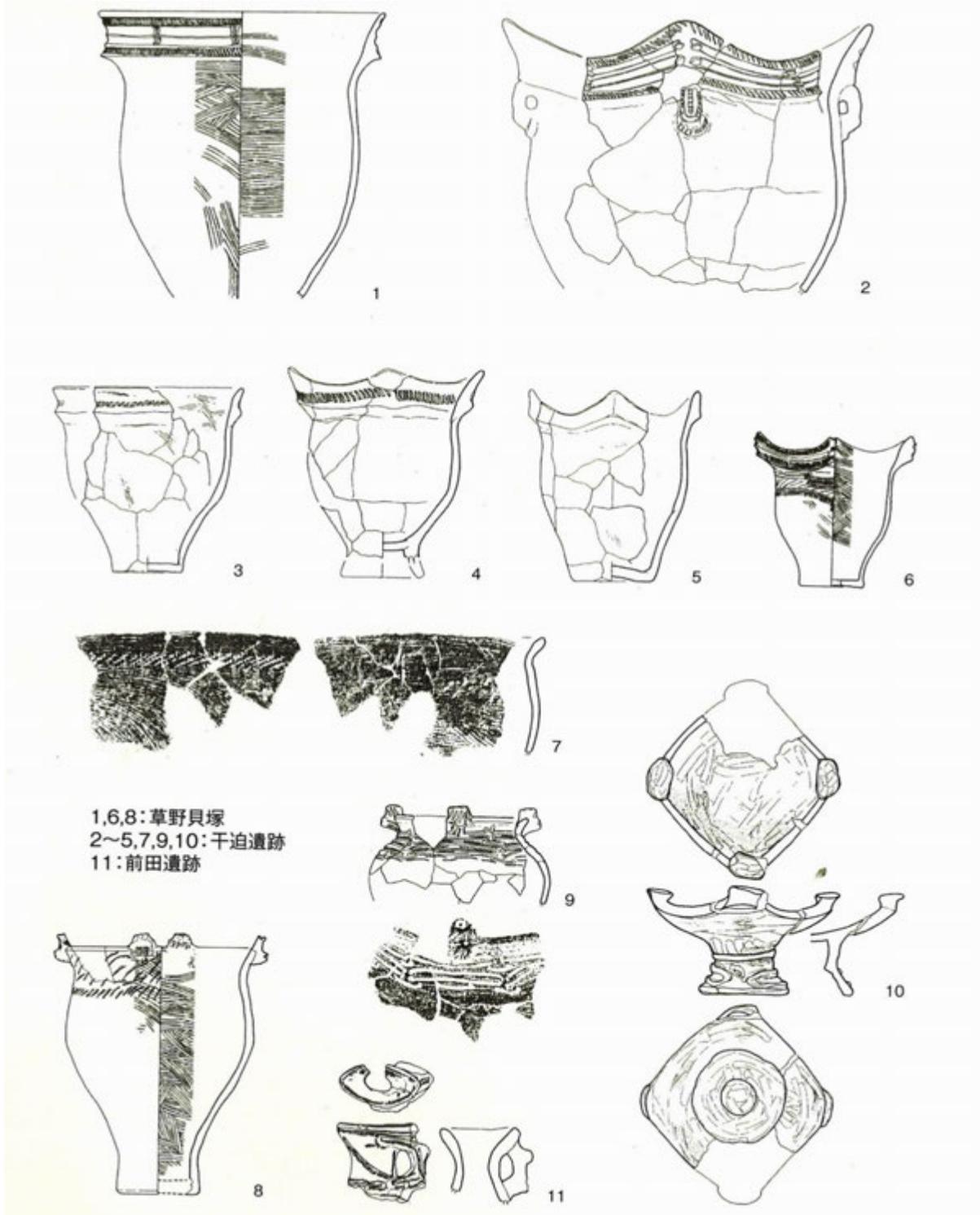
何といても特徴的なのが深鉢の口縁部（口の部分）の断面形が三角形をしているということです。三森氏は「突角形」と表現していました。深鉢は外面にススが付着したものもありますので、現在の鍋のような使用法が考えられています。口縁部に4つの頂部がある山形と平らに仕上げた平縁があります（図7-1～8）。

台付皿（鉢）形土器（図7-10）の存在も特徴の1つです。のちの弥生時代や古墳時代に見られる高坏（たかつき）と似た器形をしています。器面を赤色や白色の顔料で飾る例が多いなど、他の型式ではあまり見かけないタイプの土器です。特別なまつりや儀式などで用いられた可能性が考えられています。舟形状の口縁部をもつ壺形土器（図7-11）も類例が少なく注目されています。

文様 (図7)

文様には爪形状の刺突文を連続して施すもの、幅0.5~1.0cmの沈線(棒状の工具で引いた線)、二枚貝の縁を利用した貝殻刺突文等があります。これらの文様を単独、あるいはそれぞれを組み合わせて表現し、器面を飾っています。中には全然文様を施さない、いわゆる無文土器(図7-5)もあります。

もともと断面三角形のより口縁に近い方に文様を施すものがほとんどでしたが、少しずつ角部より下の方にも文様があふれる個体も登場するようになりました。



(縮尺: 1/6)

図7 市来式土器の概要 (表2-61より)

分布 (図8)

標式遺跡の市来貝塚がある鹿児島県本土を中心として、宮崎県や熊本県南部のいわゆる南九州(九州南部)が流行の中心ですが、遠くは愛媛県平城貝塚や長崎県五島列島の白浜貝塚などからも出土しています。また、種子島や屋久島、奄美大島や徳之島、さらには沖縄本島の浦添貝塚や伊礼原遺跡からも発見され、かなりの広がりを見せています。

このような壮大な分布に加え、鹿児島市の草野貝塚や垂水市の柗原貝塚など、貝塚からの出土が多いこと、鐘崎式土器や北久根山式土器などのような他地域で流行した土器とともに出土することなどから、海を介して盛んに交流していた時期の土器型式として注目されています。



図8 市来式土器の出土分布 (表2-57, 61より)

おわりに

発見者の有村栄助氏が第1歩を踏み出してから105年が経過しました。今日、九州を代表する縄文時代の遺跡(貝塚)として、全国の考古学研究者に知られるところとなりました。市来式土器の形(フォーム)や文様に洗練さや装飾性の高さが見られること、貝塚を形成したことから貝製品や骨角器等が多く残されていること、広範囲にわたる交流の痕跡を伝えてくれていることなど、極めて魅力的な市来貝塚には、まだまだ多くの貴重な情報が眠っているはずです。

市来式土器が出土した分布域の北東端にある愛媛県愛南町の平城貝塚は、市来貝塚と同じ縄文時代後期の貝塚で、令和6(2024)年春、国の史跡に指定されました。我らの市来貝塚も日本の歴史(縄文時代)を語る上で欠かせない遺跡であることは明白です。ぜひ近い将来、国の史跡として保護されることを期待しています。そして市来貝塚そのものや出土資料の研究をさらに進めていき、今日へと続く市来縄文人の“こころ”と“エネルギー”を、さらに未来へと語り継いでいきましょう!

串木野 I C－市来 I C間の遺跡について

鹿児島県立埋蔵文化財センター 平 美典

1 はじめに

南九州西回り自動車道は、熊本県八代市を起点とし薩摩川内市などを經由して鹿児島市へと至る、延長約 140km の高規格幹線道路です。1988 年の鹿児島道路（市来 IC－鹿児島 IC）と八代日奈久道路（八代 JCT－日奈久 IC）の事業化後、順次整備されてきました。整備の過程では多くの遺跡が調査され、鹿児島県の歴史にとって重要な発見が数多く明らかになってきました。特に今回は、いちき串木野市にある串木野 IC から市来 IC の区間で調査された遺跡について、その成果をご紹介します。

2 南九州西回り自動車道と串木野 I C～市来 I C間の遺跡について

いちき串木野市に所在する串木野 IC－市来 IC の区間は、1991 年に南九州西回り自動車道川内道路（薩摩川内都 IC～市来 IC）の一部として整備が始まり、2005 年に開通しました。この道路建設に先立ち、工事によって失われる遺跡を調査・記録するための協議が行われ、その結果、川内道路では 5 つの遺跡が対象となりました。そのうち、串木野 IC から市来 IC までの区間では、柵城跡・安茶ヶ原遺跡・市堀遺跡の 3 つの遺跡について発掘調査が実施されました。発掘調査は 2000 年に安茶ヶ原遺跡から始まり、その後順次、柵城跡、市堀遺跡と調査が行われました。2004 年 3 月に柵城跡での発掘調査の終了をもって、川内道路で行われたすべての発掘調査が完了しました。

3 かこいじょうあと 柵城跡

(1) 遺跡の位置と周辺環境

柵城跡はいちき串木野市上名字門前・柵鼻・大堂庵ほかに所在します。遺跡は五反田川中流域の標高 50m の台地、標高約 27m の山腹部、標高約 10m の低地で構成され、火山灰台地（シラス台地）、火山麓地、谷底平野に分類されます。東側約 800m には坂ノ下城跡、西側約 500m には串木野城跡、1km 圏内に浜ヶ城跡があります。現在の串木野 IC 付近を中心とした場所です。

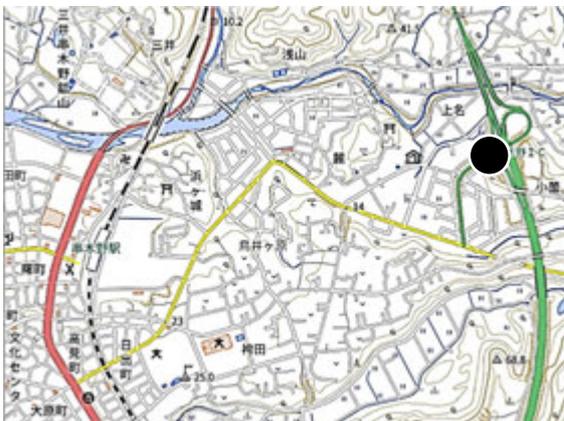


図 1 柵城跡の位置



図 2 柵城跡とその周辺（昭和 49 年）
国土交通省国土画像情報

第1表 柵城跡の主な調査成果一覧

時代	主な遺構	主な遺物
旧石器時代		【石器】三稜尖頭器
縄文時代	集石, 落とし穴, 石斧埋納遺構(デボ)	【土器】加栗山式土器, 吉田式土器, 石坂式土器, 押型文土器, 手向山式土器, 苫浜式土器, 条痕文土器, 曾畑式土器, 深浦式土器, 春日式土器, 出水式土器, 指宿式土器, 入佐式土器, 黒川式土器, 干河原段階, 組織痕土器, 刻目突帯文土器 【石器】石鏃, 石匙, 削器, 石錐, 石核, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石, 凹石, 石皿, 礫器, 石錘, 砥石, 有溝砥石
弥生時代		【土器】松木菌式土器
古墳時代		【土器】中津野式土器, 辻堂原式土器
古代	土器集中遺構, 柱列, 貝殻廃棄土坑	【土器】土師器(甕・椀・坏・皿・蓋・鉢), 黒色土器, 赤色土器, 墨書土器, ヘラ書土器, 刻書土器, 刻印土器, 耳皿, 須恵器(甕・壺・椀・坏・蓋・横瓶・円面硯・転用硯・鉄鉢), 焼塩壺 【土製品】紡錘車, 土錘 【石製品】提砥
中世	掘立柱建物跡, 方形竪穴建物跡, 大型土坑, 礫集積・土墳墓, 溝状遺構, 鍛冶関連遺構, 炉状遺構, 柱列	【土器】土師器(坏・皿), 須恵器(甕), 瓦質土器, カムイヤキ 【土製品】火舎, 焙烙 【陶磁器】青磁(碗・皿, 香炉), 白磁(碗), 青花, 粉青沙器, 輸入陶器(甕・壺・盤・鉢・蓋), 天目碗, 備前焼, 唐津焼 【鍛冶関連遺物】炉壁, 鞆羽口, 鉄滓(椀形滓・流動滓・ガラス質滓・鉄塊系遺物), 鉄床石 【石製品】滑石製石鍋, 砥石, 石臼, 茶臼 【銭貨】洪武通宝, 朝鮮通宝
近世	土墳墓	【陶磁器】薩摩焼, 在地系磁器, 肥前系陶磁器, 京焼, 関西系陶器, 瀬戸・美濃, 琉球産陶器, 清朝磁器 【青銅品】煙管・六道銭・石工用具 【土製品】火具, 土人形, 鞆羽口
その他	【古代・中世】大型土坑	
	【古代～中世】	【木製品】挽物皿, 曲物, 杓子形木製品, まな板, 桶底板, 木錘, 横槌, 下駄, 部材
	【中世・近世】一字一石経塚	【石製品】五輪塔
	【中世以降】石切場, 五輪塔廃棄溝, 大中公供養塔, 良福寺井戸跡	
	【近世・近代】郷士年寄屋敷跡, 石垣, 石列, 排水溝	【土製品】瓦, 土管

(2) 遺跡の概要

梶城跡は旧石器時代から近世までの複合遺跡ですが、主に古代から近世にかけての遺構や遺物が出土しています。古代には墨書土器・刻書土器・鉄鉢、中世には掘立柱建物跡や方形竪穴建物、五輪塔、多数の外来系遺物が出土しました。中世から近世にかけては、石切場跡や石造物・石垣・石工用具・鍛冶遺構など石切場に関連する遺構・遺物が出土しています。さらに、近世では郷土年寄屋敷跡や寺院関連の遺構・遺物も確認されています。薩摩における寺院の様相や、石切場、古代～近世にかけての流通実態などを考察する上で、貴重な資料を数多く提供してくれる遺跡です。各時代の主な遺構・遺物は第1表のとおりです。

(3) 注目される調査成果

① 県内初！石切場跡の発掘調査

梶城跡では凝灰岩の石切場跡と採石作業に関連する遺構や遺物が出土されました。これは県内で初の発掘調査事例となります。石切場内から出土した遺物や年代測定分析、聞き取り調査などから、16世紀後半以前から採石が始まり、18世紀以降に終了したと推定されています。採石時のツルハシや矢穴の痕跡や、規格化された板状の石材が多く見つかっています。出土した道具にはツルハシやノミなどがあり、加工途中の石造物なども見つかることから、採掘だけでなく加工までの一連の作業が行われてと考えられます。

また石切場内では、採石による石屑を積み上げて造成し、その上に鍛冶遺構が築かれていました。これらは石工が道具の修理や製作を行うためのものと考えられます。梶城跡の石切場跡の調査は、石材の採取・加工・道具の修理といった一連の過程を総合的に理解することができる重要な成果となりました。



図3 石切場掘削状況



図4 ツルハシ痕跡



図5 採石状況1



図6 採石状況2



図7 鍛冶関連遺物



図8 石工用具

② 寺院関連の遺構・遺物

柵城跡からは、寺院や宗教に関連する遺構・遺物が多く見つかりました。古代では「刀」「力」「虫」「〇十」「田」などの文字が記された、9世紀頃の墨書土器や刻印土器、刻書土器が出土しました。特に「虫」については、同じ時期に「薩摩国蝗」というイナゴの被害に関する記録があることから、イナゴの発生に対する「まじない」を意味するものではないかとの指摘もあります。また黒色・赤色土器に刻まれた刻書や、記号的な線刻されたものも見つかっています。その他には、円面硯や蓋の転用硯、僧が托鉢時に持ち歩く鉄鉢なども出土しています。また、中世から近世と推定される、多数の五輪塔や一字一石経塚が見つかりました。五輪塔は溝を、石造物を並べて遮断し、その中に投げ込まれたような状態で見つかりました。いつこのような行為が行われたのかは不明ですが、明治初期の廃仏毀釈などの可能性も考えられます。

また調査区内には、「大中公供養塔」と呼ばれる石造物がありました（工事に伴い現在地へ移設されています）。大中公は島津家第15代当主・島津貴久で、串木野城主・島津家久の父のことです。伝承によると、家久が柵城跡に隣接した「日置田」に五輪塔と廟を建立し、その際に寺の名を「良福寺」に改めたとされています。発掘調査では、「岩水山良福寺水天善神」の銘が刻まれた碑のある井戸跡や、良福寺住職の墓石、近世墓158基などが見つかりました。しかし、建物跡は検出されませんでした。一方で、伝承とは異なる場所にも「伝良福寺跡」と呼ばれる場所があり、その近くには住職の墓石もあります。前半期の住職の墓石は柵城跡にあり、後半期の住職は伝良福寺跡付近にあることから、途中で移転した可能性も考えられますが、伝良福寺跡は発掘調査が行われていないことから、建物の位置は未だ謎に包まれています。



図9 ヘラ書き土器



図10 五輪塔廃棄溝



図11 一字一石経



図12 良福寺和尚墓石



図13 近世墓群

③ 地方郷士の生活を知る

串木野郷の加藤家屋敷跡が発見されました。江戸時代、薩摩藩では外城制度により、地域ごとに「郷」が設置され、各郷は郷士年寄という者を中心に、政治が執り行われていました。加藤家は1798年（寛政16年）にこの役職に任命された家であり、屋敷跡からは陶磁器や建物の遺構が大量に出土しました。

屋敷跡には排水路や石垣、池とみられる遺構も確認されており、当時の生活環境がうかがえます。出土した陶磁器は16世紀から19世紀の国内産を中心に、肥前や薩摩焼、京焼など多彩です。特に18世紀代には、大皿や蓋付碗など宴会用の磁器や、「くらわんか碗」と呼ばれる日常使いの肥前磁器も大量に見つっています。また、多くの植木鉢も出土し、広い庭園で使用されていたと考えられます。

これらの陶磁器は、当時の地方郷士階級の日常生活や流通状況を理解する重要な資料です。これまでは、島津本宗家や分家など上層階級がどのような陶磁器を使っていたかについては発掘調査によって明らかになっていましたが、地方郷士階級については良く分かっていませんでした。この発見によって地方郷士の暮らしぶりや陶磁器流通について新たな手掛かりとなることが期待されています。



図14 郷士年寄（加藤家）屋敷全景



図15 郷士年寄（加藤家）屋敷建物及び石垣



(左) 図16 郷士年寄（加藤家）屋敷水路跡



(上) 図17 郷士年寄（加藤家）屋敷出土陶磁器

あんちゃがはら
4 安茶ヶ原 遺跡

(1) 遺跡の位置と周辺環境

安茶ヶ原遺跡は、いちき串木野市川上字安茶中ほかに所在します。遺跡は八房川を河口から3kmほど遡った南岸沿いの標高約25mのシラス台地上に立地し、隣接して衆中小堀遺跡が、八房川を1kmほど上がった所に市来式土器の標式遺跡として著名な市来貝塚（川上貝塚）があります。またこの地は、古代日置郡と薩摩郡の郡境にあたる場所でもあります。



図18 安茶ヶ原遺跡の位置



図19 安茶ヶ原遺跡とその周辺
(昭和49年) 国土交通省国土画像情報

(2) 位置の概要

旧石器時代から近世にわたる遺構・遺物が出土しました。遺跡の中心は古代から中世です。古代では、「日置厨」と墨書された須恵器が出土しました。中世では、矩形の溝に囲まれるように四面廂建物跡が検出されました。遺跡は古代日置郡と薩摩郡の郡境に立地していることから、古代から中世の時期に、この地域においてこの遺跡が重要な役割を果たしていたことが推測されます。各時代の主な遺構・遺物は第2表のとおりです。

第2表 安茶ヶ原遺跡の主な調査成果一覧

時代	主な遺構	主な遺物
旧石器時代		【石器】 ナイフ形石器, 台形石器
縄文時代	集石, 磨石・敲石集積, 腰岳産黒曜石剥片集積, 土坑	【土器】 志風頭式土器, 加栗山式土器, 中原式土器, 深浦式土器, 市来式土器, 黒川式土器
古墳時代		【土器】 中津野式土器, 東原式土器, 辻堂原式土器
古代	須恵器廃棄土坑, 貝塚廃棄ピット	【土器】 土師器, 黒色土器, 赤色土器, 墨書土器, 須恵器
中世	掘立柱建物跡, 土師器埋納遺構, 溝状遺構, 古道	【土器】 土師器, 須恵器, 瓦質土器 【陶磁器】 輸入陶磁器
近世	古道	【陶磁器】 薩摩焼, 肥前系磁器

(3) 注目される成果

① 「日置厨」墨書土器の出土

SK15という土坑から、8世紀後半～9世紀前半頃と考えられる「日置厨」と墨書された須恵器の坏が出土しました。これは県内で5例目の出土事例で、他に①薩摩国府跡（薩摩川内市）から「国厨」銘土師器、②市ノ原遺跡第1地点（日置市）から「厨」銘土師器、③一之宮遺跡B地点（鹿児島市）から「厨」銘土師器、④橋牟礼川遺跡（指宿市）から「厨」もしくは「府」銘土師器があります。土坑の中からはほぼ完形の須恵器が3点、破片が1点出土し、土坑の中にまとめて投げ込まれたものと考えられています。

厨房という名のとおり、「厨」という文字は本来、調理する場所を意味しますが、次第に食物を保管する場所や饗宴を行う場所といった意味にも広がっていったと考えられています。古代律令制では、中央から任地へ派遣された国司が各地を巡り（国司巡行）、地元の有力者から報告を受けたり、税の徴収や犯罪の取り締まりなどの任務を行ったりしていました。そのため、各地を巡る国司等に対して食事を提供や饗宴が行われました。これらのことから、「厨」銘墨書土器が出土する遺跡は、官衙（古代の役所）や官道沿いの場所であり、国司巡行の際などに、饗宴等が行われていた地で、「厨」銘墨書土器の出土地点は、饗宴等の場における廃棄場所や、饗宴等が準備される厨房等の施設の可能性が指摘されています。当時の公的な儀式や地方行政の実態、交通路等を知るうえで、重要な手掛かりとなる資料です。

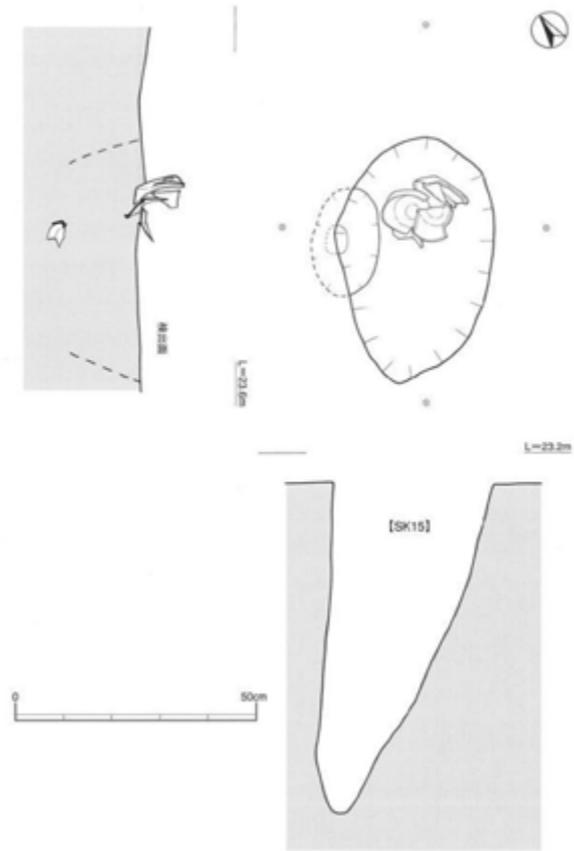


図19 日置厨銘墨書土器 (SK15) 出土状況



図20 SK15 出土須恵器



図21 「日置厨」銘墨書土器

② 中世の掘立柱建物群

四面廂建物跡2棟、片廂建物跡4棟、掘立柱建物跡14棟、溝状遺構、道跡等が検出されました。一部は古代に遡る可能性のあるものも含まれていますが、大部分はこの時期のものと考えられています。遺物は15世紀を中心とする青磁・白磁・青花等の貿易陶磁器が出土しました。

建物については、SB01を中心とするグループ、SB02を中心とするグループ、SB05を中心とするグループの大きく3群に分かれる可能性や、主軸の方向がほぼ同じであることから、時間的にほとんど差はないのではないかとの意見がありますが、溝状遺構のうちSD01は、「コ」字状の矩形を呈しており、四面廂建物跡であるSB01などの建物群を取り囲んでいることから、いずれにしても有力層もしくは公的関連施設の可能性が考えられています。

このことは、古代に「日置厨」銘墨書土器が出土したことも踏まえると、この地が古代・中世の時期に非常に重要な地であったことを推測させます。

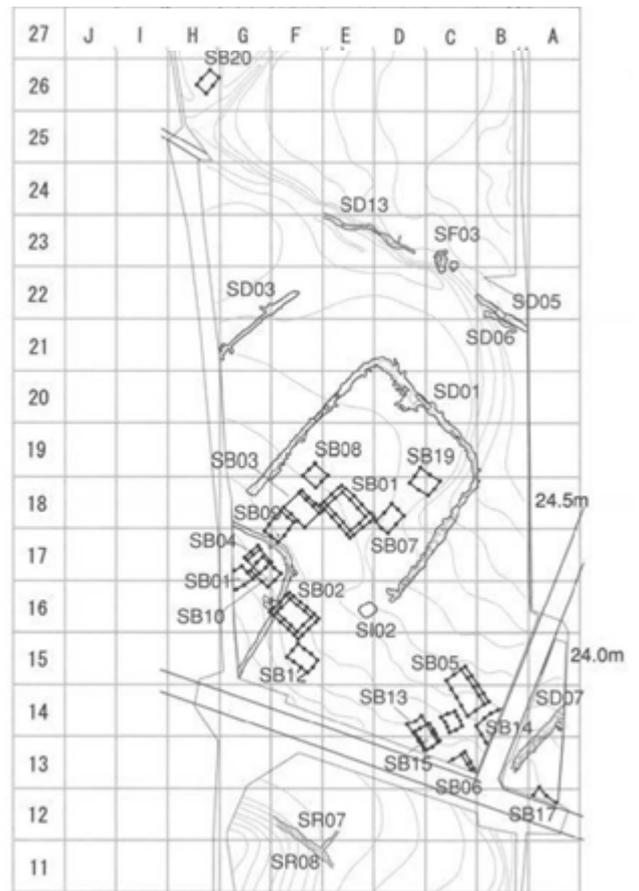


図22 中世の遺構配置図

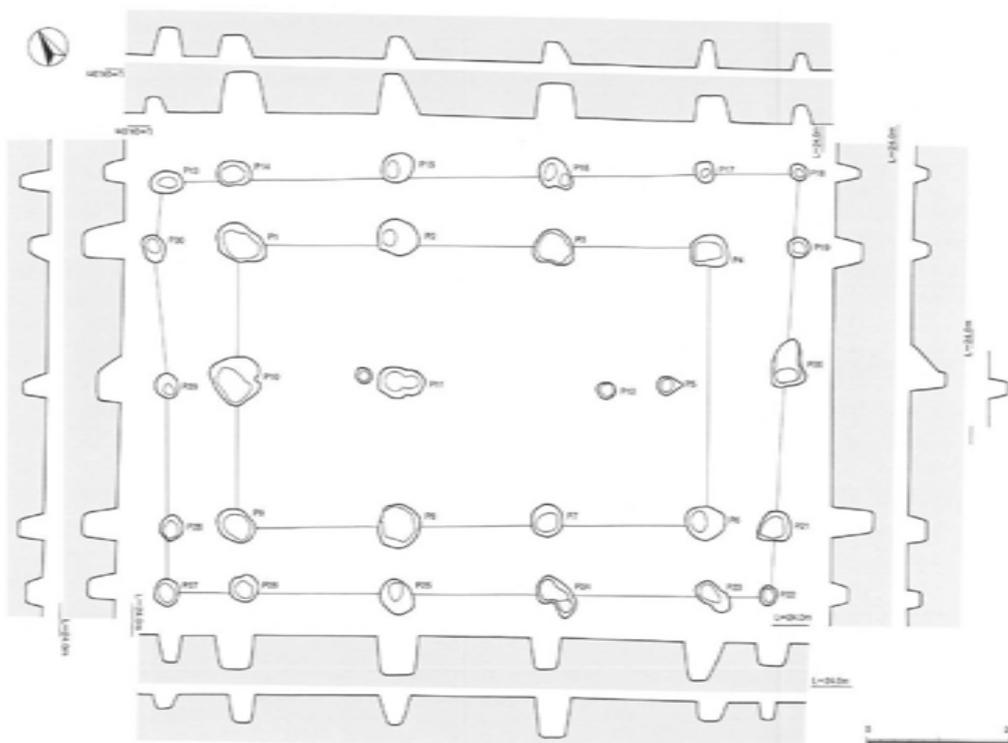


図23 四面廂付掘立柱建物跡 (SB01)

5 いちぼり 市堀遺跡

(1) 遺跡の位置と周辺環境

市堀遺跡はいちき串木野市湊町字市堀に所在します。遺跡は標高約 40mのシラス台地上に立地し、北東へ 200mほどの所に北ノ原遺跡が、北西へ 500mほどのところに安茶ヶ原遺跡があります。

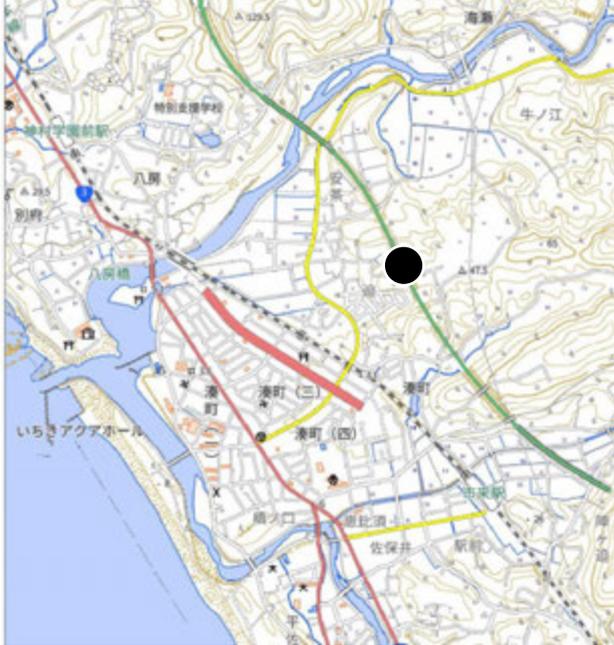


図 24 市堀遺跡の位置



図 25 市堀遺跡とその周辺 (昭和 49 年)
国土交通省国土画像情報

(2) 遺跡の概要

縄文時代～近世の遺物が出土しました。縄文時代では早期の前平式土器・貝殻条痕文土器や磨石や晩期の入佐式土器・黒川式土器が、遺構は早期の集石や落とし穴と想定される土坑が検出されました。弥生時代は中期の黒髪式土器が、古墳時代は東原式・辻堂原式土器が出土しました。また古墳時代～古代と推定される双孔棒状土錘や管状土錘、古代～中世にかけての溝状遺構、焼土域、土坑も土師器・須恵器等と一緒に検出されています。中・近世では陶磁器が出土しました。各時代の主な遺構・遺物は第3表のとおりです。

第3表 市堀遺跡の主な調査成果一覧

時代	主な遺構	主な遺物
縄文時代	集石遺構, 落とし穴	【土器】前平式土器, 条痕文土器, 入佐式土器, 黒川式土器, 黒色磨研土器 【石器】磨石, 敲石, 礫器
弥生時代		【土器】黒髪式土器
古墳時代		【土器】東原式土器, 辻堂原式土器
古代	土坑・柱穴群	【土器】土師器, 黒色土器, 須恵器 【土製品】双孔棒状土錘, 管状土錘
中・近世		【陶磁器】陶磁器

(3) 注目される成果

① 完形に復元された弥生土器

完全な形に復元することが可能な弥生土器一器が、包含層中から一括して出土しました。土器は黒髪式土器と呼ばれる弥生時代中期中頃の土器で、熊本地方を中心に出土します。弥生時代中期には薩摩半島も黒髪式土器の影響下にあるとの説がありますが、弥生時代の遺物の出土例が少なく十分には解明されていません。そのような中で完全な形に復元することのできる資料は貴重な資料です。



図 26 完全に復元された弥生土器

② 須恵器が廃棄された土坑

調査区の西側端部より、土坑が検出されました。柱穴状の土坑で、検出面からの深さは約 110cm あり、他に検出された土坑とは形状や深さが異なっています。床面は平らで硬化面がありました。土坑検出面と中位の 2ヶ所で須恵器の破片 35 点がまとめて出土しました。

出土した須恵器は甕など複数個体があり、分析の結果、場所は特定できませんでしたが、県外産の須恵器である可能性が指摘されています。掘立柱建物などの柱が抜かれた後に須恵器を意図的に埋めたのかなど、何らかの行為が想定されますが、復元できる破片がなかったことから、祭祀的な行為は考えにくいとの指摘もあり、何のために廃棄されたのか、今後の資料の増加が待たれます。



図 27 須恵器出土土坑（土坑 15 号）

6 おわりに

南九州西回り自動車道（串木野 IC－市来 IC 間）の調査では、県内初の調査や希少な遺物の出土など、重要な調査成果が多くありました。このことは、各遺跡の地が人や物、情報が行き交う重要な場所であったことを示しています。

発掘調査終了から約 20 年がたちましたが、改めてこれらの遺跡の重要性を多くの人に知っていただき、この地域の歴史を未来につなげていければと考えています。

南九州西回り自動車道建設に伴う最新の発掘調査速報 北山遺跡・新城跡・諏訪ノ前遺跡（阿久根市波留・山下）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター 辻 明啓

1 はじめに

（公財）埋蔵文化財調査センターでは、南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴い、阿久根～西目 IC 間の発掘調査を令和 2 年度から開始しました。令和 6 年度に、発掘調査を終えた諏訪ノ前遺跡および新城跡、現在も発掘調査が続いている北山遺跡の報告書を刊行しました。今回は、報告書刊行にあたり分かったことについて報告します。

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的な環境

阿久根市は、鹿児島県の北西部に位置し、市の境界は、北に日本三大潮流として名高い黒之瀬戸を隔てて長島町と相對し、東は出水市、南は薩摩川内市に接し、西は 40 km に及ぶ屈曲に富んだ海岸線で東シナ海に面しています。

諏訪ノ前遺跡・北山遺跡・新城跡は、阿久根市波留・山下に位置し、阿久根市内を流れる高松川の左岸、標高約 30～37m の愛宕山山麓に広がる台地上に所在します。

図 2 は、明治 34（1901）年に日本陸軍参謀本部が測量し作成した地形図です。現代でも道路として利用されている道を確認することができます。国土地理院が公開している、昭和 22（1947）年から平成 25（2013）年までに撮影された写真でも同じような状況を確認することができます。

(2) 歴史的な環境

阿久根市波留・山下は、古来より人の足跡を追うことができます。平安時代中期に編纂された延喜式に記載の宿駅である英祢^{あくね}駅の比定地の一つとされています。また、北部の脇本地区、黒之瀬戸は万葉集で大伴旅人の歌にも詠まれるほどで、平安時代中頃まで太宰府と薩摩・大隅を結ぶ海上交通の要所でした。

中世には、市街地東方 1.5 km に位置する愛宕山周辺に山城が築かれ、この中に莫祢^{あくね}城が含まれます。莫祢城は、三代莫祢成光の時（12 世紀頃）



図 1 遺跡周辺地形図
（斜線部はシラス台地、点線は谷部）



図 2 明治 34（1901）年測量図
（日本陸軍参謀本部）



図 3 莫祢（阿久根）氏関連城跡位置

に、波留（阿久根中学校周辺）の賀喜城^{がきが}から移り、その後、莫祢氏代々の居城とされている山城です（「阿久根市誌」より）。その居所も山下馬場地区に移り、現在も山下小学校東側には莫祢氏初代から三代までの供養塔とされる五輪塔が残されています。莫祢城の山麓地区は、現在でも「麓」地区と呼ばれ、所々に石垣等が見られます。莫祢城以外にも中之城跡、新城跡、大石城跡、小田城跡など複数の城址が波留・山下及び田代・鶴川内地区に点在します。天然の地形を利用した小規模な野城で、時期は中世初期（鎌倉時代）及び南北朝時代のものが大部分です。

3 注目される調査成果

3遺跡とも様々な時代にわたって成果が出ています。全てを紹介したいところですが、膨大な内容のため、それぞれの遺跡で注目される調査成果を1つずつ紹介します。

(1) 北山遺跡「縄文時代早期出土遺物から」

北山遺跡では、令和5年度に実施した発掘調査で、ほぼ完形に復元することができる土器が土坑内から出土しました。

この土器は、^{まどころ}政所式土器といい大分県で多く発見される土器です。土坑1号内で採取した炭化物の放射性年代測定は、約9,000年前という分析結果が出ており、この政所式土器が使用されていたと考えられている時期と一致していました。

この他にも、中原式土器（熊本）、別府原土器（宮崎）など、県外で発見されている土器が見つかりました。

これらの土器の出土から、

- ① 外から阿久根に持ち込まれた
 - ② 作り方を知っている人が阿久根で作った
- など、色々なことを想定することができます。

土器だけでなく、石器の材料として使われる黒曜石も、日東系（鹿児島県大分地区）、上牛鼻系（鹿児島県串木野東地区）、腰岳系（佐賀県腰岳地区）、淀姫系や針尾島系（長崎県佐世保地区）、姫島系（大分県姫島地区）と、県内だけでなく県外で採取することができる黒曜石が出土しています。



図4 北山遺跡土坑1号

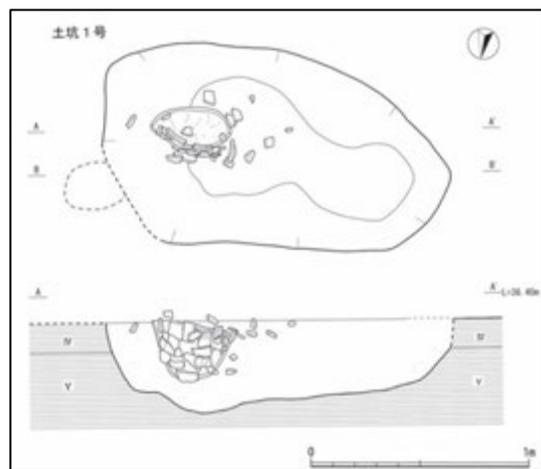


図5 北山遺跡土坑1号出土状況図



図6 政所式土器復元状況

これらの遺物が出土している状況から、かなり昔から人やものの行き来が盛んであったことがうかがえます。どのような経路でこの地にこれらの遺物が入ってきたのか、検討をしていくことが今後必要です。

(2) 新城跡「中世の^{こぐち}虎口状遺構について」

虎口状遺構は、周辺の低地から約10m高い痩せ尾根状の台地で見つかりました。平面形は長軸13m、短軸11.2mの隅丸長方形を呈し、西側の台地を分断する規模の大型土坑（検出面からの深さが約2.6m）に、断面形が「V」字状の堀切様通路を接続させた造りです。通路は入口に近づくにつれて狭くなり、最も狭いところで検出面からの深さ約1.6m、床面の幅20cmで人一人が通るのも難しい状況でした。通路状遺構は大型土坑の手前で大きく角度を変え、入口で一段高くなっています。大型土坑は掘り鉢のような形状で検出されましたが、築造時は壁がもっと切り立っていたことが推測され、高い防御性をもっていたと考えられます。床面で出土した炭化材の年代測定結果や、遺物の出土状況から、機能した時期は15世紀中頃から16世紀末頃と考えられます。虎口と堀切の両方の機能を持ち合わせた防御施設の可能性があります。ただし、大型土坑の機能は説明が難しく、今後の検討課題です。



図7 虎口状遺構実測図



図8 虎口状遺構空中写真

(3) 諏訪ノ前遺跡「中世のトイレ遺構について」

諏訪ノ前遺跡で検出したトイレ遺構は、科学的な分析により裏付けされた県内初の事例です。

科学分析については「寄生虫卵・虫媒花の花粉が検出された」、「リン酸の値が高い」などトイレ遺構を支持する結果が得られました。また、遺構最下層には、褐灰色の糞便堆積層と考えられる埋土が入っていました。

トイレ遺構1号内から出土した炭化物等から年代測定を行ったところ、14世紀の年代を得ることができました。

また、当時の食生活を推定できるものも見つかりました。ゴマやイネ、ヤマモモ、シマサルナシなどが検出されています。また花粉からは、アブラナ科やソバ属も確認されました。また貝の蓋も出土しています。

諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構と類似した土坑は、県内でも見つかっていることから、トイレ遺構の可能性も想定しながら調査を行っていく必要があります。



図9 トイレ遺構断面



図10 トイレ遺構サイズ

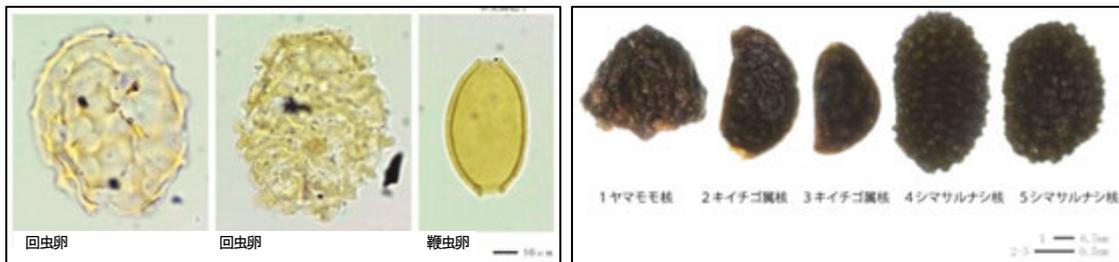


図11 寄生虫卵

図12 遺構内出土種子

参考文献

阿久根市 1974『阿久根市誌』

(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2025『新城跡』(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (59)

(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2025『諏訪ノ前遺跡』(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (60)

(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2025『北山遺跡2』(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (61)

遺跡を3D・ARで見よう！

※ スマートフォンやOSのバージョンによって、表示できないことがあります。

※ AR体験は「STYLY」という無料アプリのインストールが必要です。

名称	3D	AR
<p>上野原遺跡復元住居</p> <p>上野原遺跡の縄文時代早期の復元住居です。住居内が見えるように、後半分はカットしています。中で生活している様子がわかります。</p>		
<p>市来貝塚貝塚（剥ぎ取り）</p> <p>市来貝塚の剥ぎ取り資料です。様々な種類の貝が積み重なっているのがわかります。</p>	<p>市来貝塚剥ぎ取り資料 市来貝塚剥ぎ取り資料</p>  <p>市来貝塚剥ぎ取り資料 市来貝塚剥ぎ取り資料</p>	
<p>縄文人骨（市来貝塚）</p> <p>市来貝塚で出土した縄文人の人骨です。類例の少ない貴重な資料です。人骨が苦手な方は、閲覧についてはご注意ください。</p>	<p>市来貝塚縄文人骨 市来貝塚縄文人骨</p>  <p>市来貝塚縄文人骨 市来貝塚縄文人骨</p>	
<p>新城跡枡形部</p> <p>阿久根市にある中世の山城跡です。見つかった遺構は、山城の虎口（出入口）に類似しており、防御施設と考えられます。</p>	<p>新城跡枡形部 新城跡枡形部</p>  <p>新城跡枡形部 新城跡枡形部</p>	

名称	3D	AR
<p>鬼瓦（鹿児島城跡）</p> <p>鹿児島城跡の発掘調査で見つかった鬼瓦です。この鬼瓦をもとに、御楼門の鬼瓦が復元されています。当時も屋根の上から城下を見守っていたのでしょうか。</p>	<p>鬼瓦（鹿児島城跡）</p>  <p>鬼瓦（鹿児島城跡）</p>	
<p>鹿児島城跡（枡形部分）</p> <p>鹿児島（鶴丸）城跡の枡形部分の石垣です。現在は御楼門が建っていますが、それ以前はこのように見えていました。</p>	<p>鹿児島城跡枡形部</p>  <p>鹿児島城跡枡形部</p>	
<p>縄文時代の落とし穴（半裁）</p> <p>志布志市の「野首遺跡」で見つかりました。深さは約2mあります。底には、木のクイをさしていた跡もあります。</p>	<p>落とし穴（野首遺跡）</p>  <p>落とし穴（野首遺跡）</p>	

鹿児島県立埋蔵文化財センターホームページ・SNS フォローやブックマーク登録がおすすめです



ホームページ



Facebook



@KAGOSHIMA_MAIBUN

インスタグラム